

■ 肢体不自由のある子ども・知的障害のある子どもへの実践事例

DAISYキャラバン隊を継続し、 授業への活用や新たな活用方法を探る

東京都立鹿本学園

本多 桂子

はじめに

東京都立鹿本学園は、2014年4月に開校した肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、2部門5学部で構成される特別支援学校です。

児童・生徒数は、肢体不自由教育部門187名、知的障害教育部門262名、合計449名と大規模校であり、子どもたちの障害の状況は多様です。

マルチメディアDAISY図書を活用した学習活動は、母体校であった旧都立江戸川特別支援学校（肢体不自由）から「聞く読書」として始まり4年目となります。

昨年度は、肢体不自由・知的障害両教育部門の子どもたちへの集団指導（「DAISYキャラバン隊」としてお話を開催）を中心に全校で取り組みました。本校は今年度、東京都教育委員会指定の言語能力向上拠点校3年目の集大成として、「文字・言語の獲得に至る初期段階の指導から読書・発表に至る段階的な指導を通じて、障害の程度・状態にかかわらず、

言語の表現手段や文章表現の習得及び思考力・判断力を鍛えることにより、共生社会を人々と協調し豊かにたくましく生き抜くことができる確かな学力と自信を身に付けさせる」を目標に、読書環境の整備、活用の拡大や言語能力の向上を重点に授業実践を行っています。

マルチメディアDAISY図書の活用は、その目標の実現の一端を担い、昨年度同様に全校への普及と啓発はもちろんのこと、授業における個別や小集団での活用方法など、新しい活用方法を探り、活用の拡大を目指すこととしました。

マルチメディアDAISY図書は、開校当初から図書室や校内のLAN環境のもとパソコンに導入し、いつでも使用できる状態にありましたが、今年度は図書館の分類方法を外部の専門家と連携しながらリニューアルしたため、個別のICTパソコンにCDをインストールして使用しました。（12ページ「複数の学級で使いたい・保存版を作成したい」を参照）

昨年度は昼休みを利用し、マルチメディアDAISY図書を活用したお話し会（以下、DAISYキャラバン隊）と称し、大型テレビによる集団視聴を行い、子どもたちの興味・関心を高めながら、教職員への普及と啓発を図りました。これによって、両部門の子どもたちや教員の理解が深まり、活用してみたいと思う人が増えました。

活用する際には、子どもたちの障害の程度や読書経験の差によって、作品の長さや内容などを選択する必要があります。さらに低学年になればなるほど、教員との関係性が子どもに影響することもわかりました。

学習指導での活用例として、肢体不自由教育部門の知的障害を併せ有する教育課程の学習グループが物語の読解を促す学習と、知的障害教育部門の自閉症学級による音読学習を行いました。授業の活用では教員が子どもたちの課題の実態把握をし、内容を整理し、目標を立てて、マルチメディアDAISY図書を活用しています。

読解では、物語の内容を整理して順序立てて話したり、説明したりする言葉による発信力の向上を促すことがわかりました。音読では、抑揚のある読み方やハイライト部分が移動されるマルチメディアDAISY図書

の特性が構音する力を育て、自分で音読する力の獲得に有効であることがわかりました。さらに、この学習活動の中で人との関わり方や人と関わることの良さを知るコミュニケーションの獲得にも影響を与えることがわかりました。

そこで今年度は、その有効性を生かして、DAISYキャラバン隊を継続することで多くの子どもたちおよび教員への普及と啓発を図り、授業への活用拡大と新たな活用方法を探ることとしました。

昼休みなどを利用した集団での活用例

（１）子どもの実態

①期間 7月～12月

②時間 給食前後の15分間

③形態 大型テレビによる集団視聴

肢体不自由教育部門（小・中・高）は各教室を巡回し、知的障害教育部門（小・中）は隔週の同じ曜日に一定の場所にて開催しました。

* 視聴する際は、多様な障害の実態から、楽に見られる姿勢をとるようにしました。

* 作品は2016年のCDの中から15分程度のお話（子どもたちの実態に合わせて司書教諭による選択、または学級担任のリクエスト作品）

④成果と課題

肢体不自由教育部門では、小学部、中学部ともに、短い作品やリズムのある作品が好まれる傾向でした。言葉のリズムや音の高低がはっきりしているほど、よく聞き、障害の重い子どもにも好評でした。

高等部では教員の読み聞かせが定着している学年ほど、長い物語はよく聞いて、笑ったり声を出したりと表情豊かに聞く姿が見られました。

残念ながら、今年度司書教諭の対応できる時間が、給食前後のみの時間に限定されてしまい、医療的ケアのある子どもたちがいる学年や学習グループには十分に行うことが難しい部分がありました。こうした制約を補うために学級担任がより使用しやすくすることが大事です。そのためには、ネットワークの充実やDAISYの活用に対応できる司書教諭の増員などが必要であると考えています。

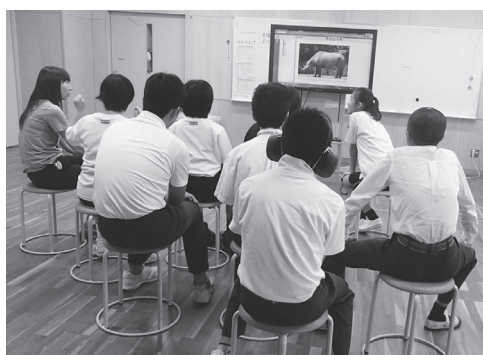
知的障害教育部門では、特定の場所に集まって行います。学年も障害の実態もさまざまな子どもたちが参加しているため、作品選択はなかなか難しいところです。落ち着かない子どもたちには、教職員と一緒に見ることでより集中するように支援しました。回数を重ねることで、リピーターの子どもたちができ、毎回楽しみにしてくれるようになりました。

作品については『へんしん おば

け』『かお かお どんなかお』が両部門ともに人気で、今年度の作品はバラエティに富んでいて良かったです。多様な作品が増えることで、子どもたちの興味や関心が拡大し、読書の世界が広がることを期待できました。



肢体不自由教育部門



知的障害教育部門

学習指導での活用例

(1) 肢体不自由教育部門中学部・高等部における自立活動を主とする教育課程の学習グループの国語や総合的な学習の時間に活用した例です。どの学級も障害の重い生徒を対象にしています。

昨年度のDAISYキャラバン隊におい

て、マルチメディアDAISY図書にふれ、そのお話を聞く楽しさを知っている生徒を対象に内容の読解を促す学習に取り組みました。

以前よりDAISY図書を見たり聞いたりすることは好きだった生徒たちですが、繰り返し見たり聞いたりすることで、場面の變化に声を出して期待したり、表情を変えたりする様子が見られました。

これはマルチメディアDAISY図書の抑揚やリズムある音声をよく聞き取り、繰り返しの中で理解していると考えられます。例えば『へんしんおばけ』の中に出てくる繰り返しの擬態語や擬音語は、はっと表情を変える、声を出して笑う、笑顔になるなど、子どもなりの表現で教員に気持ちを伝える様子が見られました。

このように重い障害がある子どもたちにとって、本と出会う楽しみ、繰り返しの学習で場面の變化を感じとり、表出していく方法として、マルチメディアDAISY図書は有効と言えました。また、東京都の肢体不自由教育部門では、学校介護職員の導入を行っています。学校介護職員と教員との連携は、子どもたちの学習に必要不可欠です。学校介護職員との連携授業の中にも、マルチメディアDAISY図書を導入しています。学校介護職員の中には、読み聞かせが初めてという方も少なくありません。マルチメディアDAISY図書は、

誰がどんな時に行っても同じように子どもたちが楽しめるという特性があり、教員にとって学校介護職員との連携に安心して活用しているようです。

(2) 2016年7月頃、公益財団法人伊藤忠記念財団様より、生徒が百人一首を読み上げた録音データの提供について相談がありました。これには、肢体不自由教育部門中学部の準ずる教育課程の生徒が意欲的に取り組みました。100首中52首の札を読む機会がありました。百人一首は毎年近隣の中学校と交流戦を行っていることもあり、今回のお話を受け、読み札の古語文を現代文の読み方に直し、ふりがなをつける学習から入りました。その読み札を作者の気持ちになって読む練習もしました。そうすることで、大変上手に読むことができるようになりました。



肢体不自由教育部門中学部

(3) 肢体不自由教育部門高等部の知的障害を併せ有する教育課程の生徒には、国語科で音読の練習をさせ、「ひ

なぎく」というアプリを使用して、マルチメディアDAISYの作成をしました。この学習グループは、質問に答える際に主語や述語が明確ではなく、具体的な内容の説明が難しい生徒が大半です。日常の学習の中で、教員からの質問にも具体的に気持ちを伝えることが苦手な生徒が多く、「誰と」「どこで」「何を」などと言ったことを逆に聞き返されることもあります。読書に関してはスムーズに読める生徒、読み間違えの多い生徒、逐次読みの生徒と、実態はさまざまです。

今回はその中で読むことが苦手な生徒を中心に、詩を読む学習をしました。詩は文自体が短く、読みやすいという特徴のある作品を選択し、繰り返し読む練習をしました。初めはわかち書きで1文ずつ読んでいた生徒も、1ページに2～3行増えても読めるようになってきました。自分の声を聞いて、どんなふうに読んでいるかを意識でき、現在もスムーズに読むことに取り組んでいます。それを見ていた生徒たちも参加したいと意欲的に取り組んでいます。

このアプリはすぐに自分の声を聞いて確かめることができるので、生徒たちにとっても面白いようです。あまり自分の声を聞く機会がないので、こんなふうに聞こえるのかと感心する生徒もいました。このアプリは簡単に使用できるものの、1枚の単独のものしか

できないので、物語を作成することができません。

今後は生徒自身だけでなく、絵本などを読んで、友達に聞いてもらいやすい内容が作成できると、もっと活用方法が広がるのではと考えています。



肢体不自由教育部門高等部

おわりに

読書は、自分で見る、聞く、相手に読む、読んでもらうという活動を通して、言葉の知識が深まっていきます。また、本を読むことだけに留まらず、気持ちを落ち着かせる効果や言葉の面白さを感じ、感想を共用できる楽しさもあります。

障害などにより、普通の本では読書することが困難な子どもたちにとって、電子図書は本にかかわる有効な機会だと考えます。

これからも子どもの読書に対する興味や関心を高める有効な手段として、マルチメディアDAISY図書がより充実していくことを期待しています。